

名古屋中村遊廓の建築計画的な研究

その1 中村遊廓の都市計画

正会員○ 松村 秀弦※²同 若山 滋 ※¹同 近藤 正一※²同 渡辺 孝一※²

【序】昭和33年売春防止法の施行以来日本の夜の都市景観を照らした全国各地の遊廓の灯は消え、現在ではそれぞれの地域において別種の機能を果たしつつある。名古屋の中心部に程近い中村遊廓もその一つであり、現在では特殊浴場、料理店、旅館などに転業したものが残る他は、量販店や病院、パチンコ店、マンション等に変貌している。大正12年に成立した遊廓建築は数寄屋風の意匠が凝らされている和風を中心としながらも、当時のモダンなデザインが散りばめられているものが多く、風俗文化的にも建築意匠的にも興味深い。しかしそれらは歴史的な文化財として認められることもなく、現在では建物の老朽化が進み、取り壊しも目立つようになってきており、早急に建築計画的な立場から調査する必要があるのが現状である。若山研究室は1991年、92年にかけて名古屋中村遊廓について現存建物の実測調査とともにヒアリング調査等を行ってきた。本研究は、それらの資料をもとに、近世に繁栄を極めた島原・新吉原の両遊廓との比較から、中村遊廓の都市構造の特徴を明らかにすることをその目的とする。

【中村遊廓の起こり】「中村遊廓」の源流は、安政年間に宿屋笹野屋庄兵衛の上願によって、大須観音堂付近に「北野新地」が開かれたことに始まる。北野新地は繁栄を極め、大須観音堂裏から堀川以東に移転し、「旭廓」と改名した。この旭廓も栄えたが、明治中期

になると市街地の拡大にともない、風紀上の問題によって大正12年 3月末日付けで中村に移転することになった。これが中村遊廓の誕生である。

【造成・動線計画】中村遊廓は、名古屋駅西方の稲田や畑等の低湿地を現在の日赤病院があるところより土を取り、かさ上げして造成した。その大きさは一辺を300mとする正方形、31620坪であった。また中村遊廓への動線計画は、図-1で示す通り東の名古屋駅から来る方法と南の市電大門駅から来る方法の二通りで、ともに駅から直線で単純明快な動線計画である。島原や新吉原における動線は入り組んでおり、入りにくさを意図していたのと比べ、中村遊廓は客が来やすいようにと商売を意識したある意味で近代的な動線計画であったことがうかがえる。

【道路計画】図-2より中村遊廓は、縦1本、横3本の大通りに、本来堀のある場所を道路で囲み、その周りを建物で一周囲んだ形をしており島原や新吉原の遊廓(図-3、図-4)同様に三筋構成で構成された従来の遊廓の都市構造をある程度踏襲している。しかし動線計画、道路幅から見てもわかるように、中村遊廓のメインストリートは、市電大門町駅と通じている縦の大門通りと名古屋駅に通じている横の大門町通りの二つあり、遊廓は四分されている。この点は大門通りのみで二分されている島原、新吉原と異なっている。ま



図-1 動線図

A study on architectural planning and design
for Nagoya Nakamura-yukaku
Part 1 Urban planning for Nakamura-yukaku

5250

Matsumura Hozuru et al.

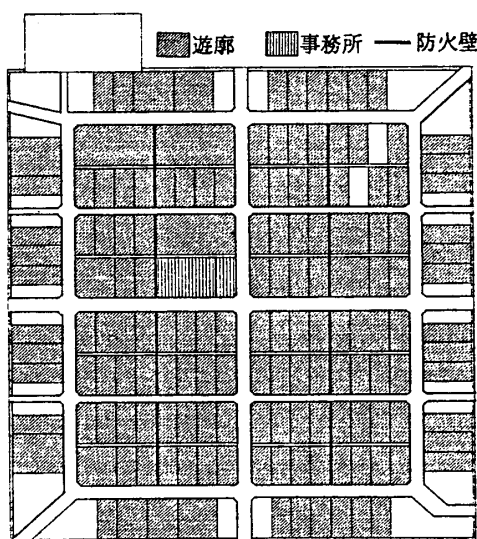


図-2 中村遊廓



図-5 航空写真 (昭和11年頃)

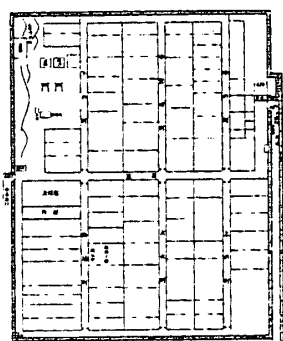


図-3 島原遊廓 (1750年頃)

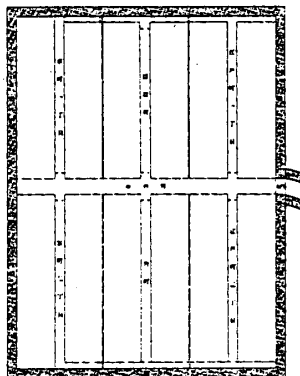


図-4 新吉原遊廓

た中村遊廓は囲郭性を持つために島原、新吉原同様に外周に堀を巡らしただけでなく、四隅に斜めの道を配したのが特徴である。この斜めの道はこの一角の独自性を強調し、その結果図-5で示すように後代になっても周りの街に吸収されていない。この放射状道路の背景には意識的ではないにしろ西洋の都市計画の影響があるものと思われる。さらに中村遊廓は他の遊廓にはみられない自動車の交通を考えて交差点の四隅が切り取られている形になっていることが特徴であり、これも近代都市として計画された一面を表している。

【営業システムと配置計画】中村遊廓には従来の遊廓の制度である揚屋、引手茶屋がみられず、娼妓についても島原、新吉原のような階級を設けていない。敷地建築にもそういった格差がほとんどなく、だいたいは一筆125坪で、間口約46.5尺、奥行き約93尺と決められていた。しかし四つのブロックのうち南の大門駅、東の名古屋駅から最も遠い位置に当たる北西部は、先に述べた一筆より大きい大店が集中している。また素盞男神社、県立病院があったことからこの一画は中村遊廓の奥の部分としてやや特殊であると言える。

* 図-3、図-4は、
内藤 昌氏
「角屋の研究」
による。



図-6 防火壁

【防火対策】中村遊廓には図-2で示すように防火用水の役目である外周の約幅 2m堀の他に、8つのブロックの中央に、南北に厚さ 220mmから 250mmのコンクリート造の防火壁 (図-6) が設けられた。また郭街への出入口が12箇所もあり、廓内の道路のどの地点からも直線的に避難できるようになっている。道幅も広くそれまでの遊廓ではあまりとられなかった近代的な防火対策がとられていた。

【結】中村遊廓は三筋構成等の基本的都市構造は近世の遊廓の伝統を踏襲して、しかもそれを理想の形態として完成させている。しかし営業面では面倒なしきたりにこだわらず、都市計画、動線計画、地割、防災、交通等様々な面において伝統よりも実益を優先させるという近代的思想を取り入れた遊廓でもある。中村遊廓は従来の遊廓都市構造に西洋的などいえる都市思想を取り入れ、経営上いかに成功を納めるかという点を追求した一種の近代的遊興都市であったといえるのではないか。

※¹名古屋工業大学教授・工博

※²名古屋工業大学大学院